不道徳主義再考 —— A.W. イートンの「ラフ・ヒーロー」概念と想像的抵抗を中心に

京都大学　中西 健

本発表では、芸術と倫理の関係について A. W. イートン（A. W. Eaton）の主張を中心に検討する。芸術作品の持つ美的な価値と倫理的な価値がどのように関わるのかは古来より長い論争があるが、近年では主に三つの立場に整理され議論が進められている。まず自律主義は美的価値と倫理的価値に何の相関も認めない立場であり、道徳主義と不道徳主義はこれらに相関を認めるものの、道徳主義は作品の倫理的な欠点が作品を美的に損なうと考えるのに対し、不道徳主義は倫理的な欠点が時に作品の美的な価値に寄与すると考える点で異なっている。道徳主義の根底にあるのは、ある作品内において不道徳な行いをする人物が適切に非難されないような場合、その事は作品の欠点となり、人はそうした粗野な英雄（rough heroes）に共感する事がないとするヒュームの主張であるが、本発表で取り上げるイートンは 2012 年の “Robust Immoralism” においてまさにこの粗野な英雄「ラフ・ヒーロー」と、それが引き起こす「想像的抵抗（imaginative resistance）」と呼ばれる現象が不道徳主義を擁護する根拠として挙げられると主張する。

イートンの言うラフ・ヒーローとはヒュームのそれをより発展させたものであり、本質的に不道徳であるにも関わらず我々の心を惹きつけるような魅力を持つ主役の事を指す。だが作品が道徳的欠陥を持つ人物を魅力的に描こうとするならば、ヒュームの言う通り鑑賞者はその魅力を感じる事が難しい。イートンはこれを鑑賞者に想像的抵抗が生じているからだと説明する。想像的抵抗とは、フィクション内における命題の内鑑賞者の道徳観から逸脱している物に関して適切に想像する事が難しいという現象を指し、ラフ・ヒーローを扱う作品はこれらの想像的抵抗を乗り越えるという課題に直面する。ここからイートンは[1]優れたラフ・ヒーロー作品は想像的抵抗を素晴らしい芸術的技巧である程度乗り越え鑑賞者に魅力を感じさせる事ができるという事と、[2]それでも残り続ける抵抗と魅力との間で鑑賞者が引き裂かれるような思いをする両面的な体験に独自の美的価値があるという二つの美的な達成を主張し、そしてこの達成の前提にはラフ・ヒーローの不道徳性が不可欠である為、倫理的欠点が美的に寄与していると結論づける。

本発表ではこの主張に対し、他論者からの批判も参考にしつつ問題点を指摘する。まず[1]の主張に関しては不道徳性とそれにより生じる抵抗が単なる課題としか設定されておらず、それゆえ倫理的欠陥が美的に寄与しているとは言えない事を示し、[2]に関しては一定の説得力を認めるもののその体験を価値あるものにしているのは倫理と無関係な魅力ではないかと指摘する。本発表は現在の不道徳主義を検討すると共に、想像的抵抗をめぐる議論にも貢献する事を目指す。